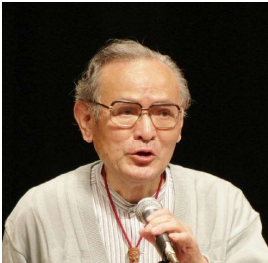


追悼 大石又七さん

米国のビキニ水爆実験で被爆した「第五福竜丸」元乗組員の大石又七さんが、3月7日に誤えん性肺炎のためお亡くなりになりました。87歳でした。生涯、核廃絶を訴え続け、「怒りの大集会」の呼びかけ発起人として集会の成功にもご尽力いただきました。ともにたたかってきたものとして、本当に残念でなりません。こころより哀悼の意を表します。



「6・5 怒りの大集会」で訴える大石さん（2011年）

大石さんは1954年3月1日未明、太平洋のマーシャル諸島ビキニ環礁近海で、遠洋マグロ漁船「第五福竜丸」の乗組員として操業中、同環礁で米国が強行した水爆実験によって被爆しました。それは「地球が壊れた」というほどすさまじいものだったそうです。

ピカッと光ったとき、光だけが右の水平線から左の水平線まで暗い空をさーっと夕焼けのように赤く染めると、今度は海底から足下を震わす地鳴りのような轟音が突き上げてきた。光の出た水平線には、成層圏に達する巨大なキノコ雲が立ちのぼり、しばらくすると空から砕け散った白いサンゴが、大量の「死の灰」となって漁船の上に降り注いだのでした。

その後、乗組員全員が急性放射能症と診断され、脱毛や水疱などの体の異変が発症。大石さんは一年二ヶ月もの入院を強いられ、病の不安と社会からの偏見と、見舞金をうけとったことへのねたみに苦しみました。さらに大石さんをはじめビキニ水爆実験の被爆者は、原爆医療法から除外され、「被爆者手帳」すら交付されませんでした。

固く口を閉ざしてきた大石さんが、ビキニでの体験と核の恐ろしさを訴える証言活動を始めたのは、1983年に東京都下の中学校の依頼で講演を行ったことがきっかけでした。大石さんはその決意の理由について、2011年の「6・5 怒りの大集会」で語られています。「仲間たちが一人ずつ亡くなり、自分にも次々と不幸が襲ってくる。この恐ろしさが何ごとにもなかったかのように忘れられていくことの悔しさが募り、当事者が声を上げなければ、また必ず同じようなことが起きる、と思うようになりました」と。

その後大石さんは、原発も含め「核のない世界をつくってほしい」と、700回にも及ぶ講演活動を続けてきました。それは同時に、肝臓がんやC型肝炎などに罹患して、「三十二種類もの薬を飲みながら」のご自身の病との闘いでした。お亡くなりになる直前まで「まだまだ言いたいことや伝えたいことがある」と話されていた大石さんの姿勢に、私たちは身の引き締まる思いです。

だがこんにち、米国と中国の両大国は、大石さんの願いを蹂みするかのようになり、相互に核戦力を強化しあい、台湾、尖閣諸島、南シナ海で、いつ核戦争が勃発するかもしれない危機が深まっています。日本の菅政権は、核兵器禁止条約の批准に反対するばかりか、米国の「属国」として、中国に対して共同で戦争できる国づくりのために、憲法の改悪に突き進んでいます。私たちは決意も新たに、大石さんの心からの訴えをしっかりと受けとめ、たたかうことを誓います。

大石又七さん、安らかにやすみください。

2021年4月

戦争を許さない市民の会